

第12期東京都生涯学習審議会

第13回全体会

会議録

令和5年7月18日（火）

午後3時00分から午後4時58分まで

都庁第二本庁舎31階 特別会議室25

○出席委員

笹井 宏益 会長

澤岡 詩野 委員

竹田 和広 委員

野口 晃菜 委員

広石 拓司 委員

福本 みちよ 委員

松山 亜紀 委員

横田 美保 委員

第12期東京都生涯学習審議会 第13回全体会 会議次第

1 開会

2 議事

「これからの地域コミュニティづくりにおける都立学校の在り方」について

(1) 審議事項1

立川地区チャレンジスクールへの効果的支援の在り方

【事例紹介】

「立川地区チャレンジスクールが目指すもの」

立川地区チャレンジスクール（仮称）開設準備室 石田和仁校長

(2) 審議事項2

校内居場所カフェの魅力的運営について

（「都立高校の魅力向上に向けた実行プログラム」関係）

3 その他

今後の予定について

4 閉会

【配付資料】

資料 第12期東京都生涯学習審議会第13回全体会 審議資料

別添1 立川地区チャレンジスクール基本計画検討委員会報告書について（概要）

別添2 立川地区チャレンジスクール基本計画検討委員会報告書（平成29年10月）

第12期東京都生涯学習審議会第13回全体会

令和5年7月18日（火）

開会：午後3時00分

【生涯学習課長】 それでは、定刻になりましたので、ただいまから第12期東京都生涯学習審議会第13回全体会を開催させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、広石委員は少し遅れて出席でございますけれども、志々田副会長と海老原委員につきましては業務の御都合で欠席ということでございます。なお、本日はオンラインでの出席の委員もおりますので、ハイブリッドでの開催となります。

次に、配付資料の確認をさせていただきます。PDFでお配りしておりますが、「第12期東京都生涯学習審議会 第13回全体会 審議資料」でございます。オンラインで御参加の委員におかれましては事前に送付しております資料を御覧いただきますよう、よろしくお願いいたします。

それから、傍聴希望者については、本日はなしということでございます。

では、これから笹井会長に進行をお願いしたいと思います。笹井会長、よろしくお願いいたします。

【笹井会長】 どうも、皆さん、こんにちは。相変わらず猛暑で、こんな日はオンラインのほうがいいのにと実は思ったのですが、それはなかなかできないのですが、御参加いただきましてありがとうございます。

本日はゲストの方をお招きして幾つか審議をしたいと思っています。二つあります。1点目は、令和7年度に開設予定の立川地区チャレンジスクール（仮称）の取組をお伺いするという事です。それを伺って、支援を通じて教育活動を活性化させる方策についていろいろ御審議いただきたいというふうに考えています。2点目は、前回の審議会資料として事務局から御提供いただきました「都立高校の魅力向上に向けた実行プログラム」の中から校内居場所カフェの在り方について審議を行いたいと思っております。

それでは、本日の報告者につきまして事務局から御紹介をお願いしたいと思います。よ

ろしく申し上げます。

【生涯学習課長】 それでは、私のほうから本日の報告者について御紹介をさせていただきます。立川地区チャレンジスクール（仮称）開設準備担当校長の石田和仁先生でございます。

【石田校長】 石田と申します。よろしく申し上げます。この度こういった機会をつくっていただきまして、ありがとうございます。今日は是非よろしく申し上げます。

【生涯学習課長】 同じく開設準備担当主幹教諭の三宅信花先生であります。

【三宅主幹教諭】 三宅です。よろしく申し上げます。

【生涯学習課長】 それから、同じく開設準備担当主幹教諭の西村由夏先生でございます。

【西村主幹教諭】 西村です。よろしく申し上げます。

【生涯学習課長】 事務局から概要説明をさせていただきました後、石田校長から御報告をお願いしたいと思います。

【主任社会教育主事】 では、私のほうから説明させていただきますが、資料は右下の3ページ目をお開きください。まず最初に、立川地区チャレンジスクールの設置検討の背景を御説明いたします。いずれも出典は平成29年10月に出版された立川地区チャレンジスクール基本計画検討委員会報告書から抜粋したものでございます。お手元にコピーの資料も添付してあるかと思いますが、主たる内容についてこちらのほうで整理したスライドで説明いたします。元々チャレンジスクールができる背景にあったものは、夜間定時制の課題解決、都立高校改革というものに淵源がございます。夜間定時制は従来念頭に置いていた勤労青少年を対象としたもので設置されたわけですが、その数が減少し、在籍する生徒の多様化などの問題が上がってきています。こういった諸課題を解決するために、生徒の興味・関心、能力・適性、進路に対応できるきめ細かな指導をより充実させ、定時制の改善を図るということで、都の教育委員会では、夜間定時制課程の改革案を提案してまいりました。その端緒となったものは平成3年に開設された都立新宿山吹高等学校でございます。これはできたときは大変注目された学校かと思いますが、通信制課程を併置した単位制・無学年制の昼夜開講の多部制定時制高等学校という形で開設されました。その後、平成9年9月の都立高校改革推進計画でチャレンジスクール5校、単位制高等学校1校の設置を計画しました。平成14年10月の都立高校改革推進計画・新たな実施計画で三部制の昼夜間定時制独立校の一層の整備拡充がうたわれて、これらの計画を踏まえてチャレ

ンジスクール5校——都立桐ヶ丘高等学校、都立世田谷泉高等学校、都立大江戸高等学校、都立六本木高等学校、都立稔ヶ丘高等学校と順次開設してまいりました。

4ページ目に参ります。そういつて平成9年に提案が出てから約20年以上経過しております。この間チャレンジスクールを取り巻く状況には様々な変化がございました。将来の予測が難しい社会の中でも一人一人が未来を創り出していくための資質・能力を育む学校教育が期待されている。平成28年度に、社会が急激に変化する中では、一人一人が自らの価値観を形成し、他者と対話し協働しながら、よりよい解決策を生み出していくことが一層重要になってきたとして、平成19年に全部の学校で必修化を実施しようということとで教科「奉仕」を導入しましたが、更に時代の変化に合わせて新しい独自の教科「人間と社会」を開発し、体験活動や演習を取り入れて、道徳教育とキャリア教育の一体化を図った教育活動を展開することとしました。それと同時に、平成28年には多くの児童・生徒の育ちを学校・社会で支え、自立に導くために、不登校・中途退学対策検討委員会を設置してその報告書を取りまとめました。実はこの報告書を受けながら、生涯学習課で今施策化しているユースソーシャルワーカーの制度なども生まれたりしております。そういった流れを受けながら、平成19年の都立稔ヶ丘高等学校以来久々に、15年ぶりぐらいになるのですかね。新たなチャレンジスクールを設置しようということ、立川地区チャレンジスクールを設置しようという動きになってきました。

5ページ目のスライドに移ります。ここらあたりからどんな内容で学校を運営していくかという基本コンセプトが示されているかと思いますが、生徒のチャレンジする意欲を尊重し、つなげるには、とりわけ基礎的・基本的な学力を身に付けさせることが重要である。また、生徒一人一人に初等中等教育を通じて身に付けるべき資質・能力を確実に育むという観点から、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るために学び直しの充実が強く求められている。また、最近では大学や専門学校への進学希望者が増加してきており、より重層的で柔軟な教育課程を編成する必要があるとしています。

そういったこととともに、チャレンジスクールでございますので、生徒一人一人が基本的な生活習慣を身に付け、社会の一員としての自立を支援することが大切である。そのためには、特別な支援を要する生徒も含めて、出身中学や関連機関との連携を密にするなどして生徒の特性の把握に努めるとともに、相談機能を充実し、生徒のつまずきや悩みに耳を傾けるなど、学校全体で組織的な対応を図る必要がある。ここにはユースソーシャルワーカーも含まれますが、スクールカウンセラー等の専門家の配置を拡充したり、若者支援

NPO等と連携した支援事業などを活用して——既に平成29年頃からこういう提案がなされているということですが——継続的な取組を行うことが求められている。更に、体験活動を重視するほか、チャレンジスクールは総合学科高等学校としての性格を持っていますので、総合学科の強みを生かしてキャリア教育を充実し、社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力の形成を図っていくことが重要というような考え方の下に立川地区チャレンジスクールの基本計画が出されています。それにのっとりながら今年4月に開設準備室が誕生しまして、現在、令和7年度開校に向けての準備を、今日御登壇いただいている石田校長、三宅先生、西村先生のお三方で教育課程の編成や学校の方針などの検討をされています。

6ページに事例紹介で「立川地区チャレンジスクールが目指すもの」ということで、7ページ以降は石田校長先生のほうから御説明いただきたいと思います。

では、石田先生、よろしくお願いいたします。

【石田校長】 スライドでいきますと、7、8ページがつい先週ぐらいに出来上がった学校のことを端的に紹介するチラシでございます。こちらを作ってこれからいろいろ広報活動していこうかなというところで、これが一番分かりやすいというふうに思っています。

7ページにつきましては、チャレンジスクールの概要ですので、後ほど見ていただければ十分分かるかなと思います。

2ページ目、スライドで言うと8ページの左上にございますスクールミッションは、教育庁内にあります学校経営指導担当のほうで、学校の在り方、文言を整理しながらやり取りさせてもらって決まったものでございます。スクールミッションにつきましてはこの学校がどう在りたいのかというところがありますので、読み上げさせていただければと思います。「地域や関係機関との連携を密に多様で柔軟な教育活動を展開し、生徒が学ぶ楽しさや意義を見出します。生徒の個性・居場所・自立を大切にしたキャリア教育を推進し、生徒が自信や意欲を身に付け、社会の一員として自らの力で未来を創り出すことができるよう育成します。」、ある意味で理想に近いかもしれませんが、私たちはこれを目指してやっていきたいということで読み上げさせていただきました。正に先ほど主任社会教育主事から説明があったとおり、いわゆる全日制普通科高等学校とは違って柔軟な教育課程を組んでいくことができますので、是非、皆さんと今日は連携しながら、本当に生徒のために何が一番身になっていくのかというところをいろいろお話、御教示いただければと思います。

スライドの9ページがグランドデザインでありまして、今、学習指導要領の中で、学校がどういった形、何をやっていきたいのか図示しなさいと指示されていまして、まだ案の段階ですけれども、そこにつくっているのが今のスクールミッションと、特に重点を置いた3項目——個性とは我々はこう考えていく・何をこういうふう育てていく。居場所とは何か、自立とは何かということを書いております。また、求める生徒像（Admission Policy）、入学してきた生徒に対して Curriculum Policy、どういった教育の方針で対応していくのか。そして、本校を卒業していくまでに身に付けてもらいたい力（Graduation Policy）を体系化したものでございます。詳細な説明は割愛させていただきますが、最終的に卒業するときには自立して社会に貢献できる人を育てていきたいというふうに考えております。

また、キャリア教育を重視していく学校ですので、本校「自立のためのキャリア教育で育む4つの力」、まだ概念だけですけれども、少し整理させてもらったのを4点挙げています。人間関係形成力にはコミュニケーション力、チームワーク力を小項目で挙げさせてもらっています。2点目が自己理解・自己管理能力（考え続ける力、ストレスマネジメント力）、3点目が課題対応力（情報理解力・課題発見力、計画立案力、実行力）など、4点目がキャリアプランニング力（学ぶこと・働くことの意義の理解、将来設計力）、こういったところを3年間もしくは4年間で育てていきたいと考えています。

こういったところの学校のコンセプトを考えたのですが、本校は令和7年度開校予定ですのでまだ生徒がいません。そういった点から、本校は立川市にありますので、実は立川市教育委員会からお声かけいただきまして、先日の7月11日に立川市教育委員会主催の不登校対策連絡協議会に行つてある意味で情報収集をしてまいりました。立川市につきましても東京都の平均以上に不登校の児童・生徒は増加傾向にあるところですが、主な要因は、無気力・不安が第1位、いじめ以外の友人関係が第2位、そして親子の関わり方が多いということで、こちらの方向性は基本的に変わらないところを確認してまいりました。その場にはスクールソーシャルワーカーの方もいらっやして、その方が実際に不登校生徒の保護者と面談をした情報提供もしていただきました。いろいろひもといていくと、保護者の願いというのは、自分の子供が経済的に自立してもらいたい。やはり親ですので、最終的には子供が自分で経済的に自立していくことを願いたいと切に話してくれました。今回、立川地区チャレンジスクール開設準備室のコンセプト等をお話しさせていただいたときには、「本当に非常に期待しています」というような言葉と目で見えていただいたところでござい

ます。

今こういった状況がある中で、今回、私たち学校の中の課題をこういうふうに行っているかなければいけないと思うのは、スクールミッションの中で書かせてもらいましたが、本校を卒業したときに生徒は社会の一員として自らの力で未来を創り出すことができる。すごく高い理想だと思うのですが、こういったところを目指しています。つまり、自立をしていく。社会的な自立、経済的な自立、そして精神的な自立。こういったところから、いろいろなきっかけを踏まえながら、学び続け、成長し続けようとする生徒を育成していく。我々がどうしても関わっていけるのは3年ないしは4年ですけれども、その中で学ぶことの面白さ、楽しさ、意義を分かりながら、今度は自分たちでいろいろなものを見つけながら学んでいく。こういった根本的なところを育てていきたいと考えています。

こういった視点から卒業した姿をイメージしながら逆算すると、生徒自身の具体的な将来の目標や生き方、また、できれば経済的自立という観点から仕事ですね。これが既存の仕事ではなくて、新たな仕事を生み出す。つまり、起業家精神等も含めながら、それにつながっていくような体験的・実践的なキャリア教育。私の前の学校でもそうですが、キャリア教育をやろうとしたところで、どうしても概念的や抽象的なキャリア教育をやってしまった関係で、生徒は、本当に社会にこういうものがあって、自分はこうやっていきたいのだというのをどこまで攻めることができたかというのは少しグレーゾーンだったものがあります。今回の立川地区チャレンジスクールにつきましては、本当に系統的に実践的なキャリア教育を展開していきたいと考えております。

また、今回このチャレンジスクール自体が不登校の経験のある生徒を対象としていますので、今まで以上によりきめ細かな対応、また新たな視点で、実際に指導する教員もマインドリセットしていくことが必要かと思っています。そういったことを考えながら指導内容、指導体制を整備していくことを考えていく必要があります。

もう一度、重点的に3点の課題に取り組んでいきたいと思えます。1点目は、不登校経験のある生徒に対応した体験的・実践的キャリア教育をどうやって具体化していくか。2点目は、不登校の生徒に対応しますので、生徒の安全・安心。個性、人とは違っていいのだといったところの安全・安心を確保していく。居場所づくりですね。サードプレイスであったり。まずは、学校に来なければいけないという考え方も少し柔軟に対応してもいいのではないかとこのところ、デジタル技術を最大限活用した様々な学習支援。3点目は、生徒だけではなくて保護者も含めた多角的な支援を考えています。

今回、我々は、学校としては三つの大きな課題がある中で、是非皆さんにいろいろ御助言いただきたい、御協力いただきたいことは、私の信念でもあるのですけれども、やはり生徒に本物と出会いをさせたい。デジタルのメリットとアナログのメリットというのがあります。そういったところでやはり本物との出会いに勝るものはないというのが私の信念でもありますので、様々な世界があると思うのですけれども、最前線で活躍している人、また一流の人が、どうやっているいろいろなことを苦労しながら考えているのか。リアルな体験談であったり、その人たちと一緒に触れながら学ばせていくことをやっていきたい。ただ、私たちは残念ながらそういったつながりを今ほぼ持っていませんので、皆さんからいろいろ御協力いただけるととてもうれしいのでございます。

もう1点は、やはり新規の学校でございます。生徒もまだいない状態ですので、学校自体が今いろいろコンセプトをつくって、これから試していこうと思いますが、本当に試行錯誤の連続でございます。そういった中で、答えのない社会で通用する人材を育てていく。社会に通用していくところでスピード感のある学校経営を行いたい。第三者的な視点からの学校経営に関する改善の御助言を頂ければというところは本当に渴望している状態でございます。

少し繰り返しになりますが、最前線で活躍されている方とのつながりをつくっていききたい、連携していきたいというのが一つ。もう一つは、学校経営の改善につきまして様々な御助言、御指導を頂きたいと思っています。

私のほうから、まず今学校が何をしていきたいのかというところを、概要ですけれども、御説明は以上とさせていただきます。

【主任社会教育主事】 ありがとうございます。

せっかくですからお二人にも少し、今どんなことを思っているのか。突然振ってしまいますが、これからの学校の計画をつくるに当たって今考えたい、困っているみたいなことがあったら是非、三宅先生からお願いしてもいいですか。

【三宅主幹教諭】 三宅です。改めてよろしくお願いします。

私自身、3月までは両国にある中・高一貫校で保健体育の教員をしておりました。これまでも定時制高等学校・中学校、総合学科高等学校の経験はありましたが、今回チャレンジスクールという学校の開設準備というところに配属になりまして、正直まだチャレンジスクールについて自分自身も分かり切れていない部分があります。なので、今本当に勉強中という段階ではあります。

ただ、定時制高等学校で出会った生徒たちとのやり取りだったり環境だったり私自身がやってきたものがこの学校づくりにも生かされるのではないかなと考えながらの日々です。経験は少ないのですが、生活指導をずっとやってきたもので教育課程などのところは少し不慣れなのですが、正に授業をどうつくり上げていくか。今回、校長からもありましたが、「人間と社会」という授業や総合的な探究の時間の授業を、私は特にそうなのですが、教員という仕事が長いもので、正直、外の世界をあまり知りません。教員の仕事以外をほとんどやったことがないので、逆に世の中でいろいろな方と関わり合っている委員の方々からいろいろとお知恵を頂きたいと今お話をさせていただいてすごく思いましたので、今日この中でいろいろと御助言いただけたらと思っています。

よろしくをお願いします。

【西村主幹教諭】 西村です。私はチャレンジスクールは2校目で、以前、都立世田谷泉高等学校という別のチャレンジスクールで勤務していた経験があります。前任校も、チャレンジスクールではないのですが、都立八王子拓真高等学校でチャレンジクラスがありまして、私はそこの担任もしておりました。こちらに今勤務させてもらって、チャレンジで今まで見てきた子たちに合うような学校をいかにつくれるかみたいなことを考えているのですが、私がチャレンジを経験した10年ぐらいでもまず不登校の数自体がとも増えています。それまでだったら、こういうタイプの子だろうと思っていたステレオタイプみたいな不登校の子のイメージが、いろいろなタイプの子たちが出てきて、背景も様々ですごく裾野が広い。いろいろな意味で学校に来れなくなった。それぞれ事情、背景が違っている子たちを受け入れて、その子たちに合った教育活動をしなければいけない。そのために学校は何をやったらいいか。どういうことを取り入れればその子たちに一番マッチした教育活動になるかな。そこはすごく難しいと思いつつも、面白そうなところだと思いつつも今学校をつくる準備をしているところです。

恐らくこれまでだったら、担任の先生が頑張る、学校の先生たちが頑張るみたいにして不登校の子の対応をしてきたことが、それでは対応し切れないような時代に突入してきているのかな。外部の力を借りるとよく言いますが、いろいろなお知恵を拝借したり、いろいろな機関が協力し合って対応していくことで少しでも前に進むみたいなことができるのかなと思います。なので、こういう会で是非良いアイデアが実って形づくられて、不登校の子の支援の良い一歩が進められるとすてきだなと思って今日は参りました。

よろしくをお願いします。

【石田校長】 もう少し補足します。今2人から話してもらって、三宅のほうが教務という学校全体のプログラム、また生活指導担当で、西村のほうが進路指導、キャリア教育の計画をつくって、あとは広報活動を、2人が2役ずつ担っている形です。

今、三宅のほうから少し話があった、いろいろな科目があるところで、総合学科高等学校というのは、学校設定科目で、要は学校独自に教科・科目を設定していいという幅が非常に広いものでございます。今はまだブレインストーミングの本当にアイデアレベルで、否定なしでいろいろやっている中で、例えばゲームデザインという教科・科目をつくってみよう。そこでは、我々の思考の流れとしては、まずはアナログ版をつくろう。では、ボードゲームをつくってみよう。例えば人生ゲームをつくってみよう。

例えば不登校の経験のある子たちがつくった人生ゲームはどんなのだろう。もっと考えてみて、それをつくったところであくまでも作品である。これを地域の方、ボードゲーム屋さんが近くにあるのですね。これを商品にできたら、これが売れたら、その子にとってみれば、ある意味で社会とつながる。起業家精神であったり、どうやってマーケティングをしていくのか。実社会で自分たちのアイデアをチャレンジさせて、それが実っていくのだったらその子にとってやはり大きな自信になっていく。これで御飯が食べていける、稼げるのだというところを考えられたら、私たちとしては一人の生徒をすごく良い方向に持っていけるのではないかと様々考えています。

また、例えば近くに伊勢丹などがあるので、美容基礎。年頃の男子生徒も女子生徒も含めてお化粧品なり美容というのはすごく気になるところです。今までは割と化粧品は駄目だよというのが普通に高等学校の指導であると思います。そうではなくて、どうやったらきちんと社会人として清潔感のある身なりをしていくのか、少し違った角度で捉えていこう。そういったところを考えながら、今様々なアイデアを出しながらやっているところを補足させていただきます。

【主任社会教育主事】 私のほうからも更に補足させていただきます。前回いらっしゃらなかった何人かの委員のお手元には「都立高校の魅力向上に向けた実行プログラム」を置いてあるかと思うのですが、前回来ていただいた方にはお渡ししたかと思います。その46ページを開いていただくと、実は、今までの審議会の文脈で立川地区チャレンジスクールの取組をどう紹介しようかと考えたときに、「総合学科の活性化」というメニューをここでは挙げているのですね。先ほど石田校長の話にもあったように、チャレンジスクールは全て総合学科の三部制の学校ですので、まず審議会の切り口としては、総合学科の

活性化にチャレンジスクールの特徴を生かした支援というのはどういうものかという観点から是非いろいろと御意見を賜ればということで今日の会は設定させていただいた次第です。

私からは以上です。では、会長、お願いします。

【笹井会長】 ありがとうございます。いろいろな方から今御説明いただきましたけれども、まず、ただいまの御説明に関連して質問などありましたら是非お出しいただきたいと思います。どなたからでも結構ですので、よろしく願いいたします。オンラインで御参加の委員の方々もぜひお願いしたいと思います。

【主任社会教育主事】 自己紹介と、どんなことをやっているか、先生方に分かるように少し御説明を頂いた上でお願いします。

【広石委員】 委員をしています広石と申します。エンパブリックという会社をしまして、いろいろな企業支援や地域づくり、企業支援の相乗効果を出すような場づくりなどに取り組んでいます。

質問ですけれども、対象は不登校経験の子が前提となっているということなのか。それとも、いろいろな外国の人などで、なかなか日本の学校制度とうまくなじめなくて学校をどうしようみたいに思っている人や、それも含めて不登校なのかもしれないですけども、チャレンジスクールの対象は改めてどうなのかなと思ったので教えていただければと思います。

【石田校長】 実際は不登校の経験があるということをメインに置くのですけれども、もちろん経験のない子たちも入ってこられる学校ですし、今おっしゃっていただいた日本語が苦手な生徒も入試制度さえ越してくれば受け入れていく学校でございます。すごく包括的な答えで、すみません。

【広石委員】 分かりました。そのあたり、どういうあれなのかなと思ったので。

【笹井会長】 今の質問に関連して、要するに、チャレンジスクールも課題対応学校ということですね。その課題には必ず背景や理由があるわけです。その理由を想定していないと、カリキュラムをつくったり指導したりするのはなかなか難しいのではないかと思います。不登校の子供というのはいろいろなバックグラウンド、いろいろな事情があるわけです。どういう子たちが来ることをどのように想定しているのだろうということだと思っておりますが、その辺はいかがでしょうか。

【石田校長】 そこがまず私たちの一番の課題で、正に西村がそういった学校を経験し

てきたので、そもそもなぜ不登校になるのかと聞いたのです。答えは、人それぞれ。大きな傾向としては無気力・不安で、立川市教育委員会にも聞いてやはりそうかというところ
です。これは本当に一人一人個別に、ユースソーシャルワーカーであったり、スクールカ
ウンセラー、担任、保健室、いろいろな先生が聞き出して行って、この子の背景や……。
良い言葉を忘れてしまいましたけれども、その背景を結構洗い出して、こうではないかと
いうところを一定程度想定してアプローチしていくところからやっていく、そんな格好に
なるかと思います。

【笹井会長】 分かりました。ありがとうございます。

ほかにどうでしょうか。

【野口委員】 野口と申します。私は、障害のある子供たちのインクルーシブ教育をず
っと専門にやってきていて、特に中・高生の関わりで言うと、当然、発達障害があつて不
登校の子との関わりがすごく多い。あとは、最近、結構行っているのは少年院の子供たち
で、非行だったり虞犯といった傾向のある子供たちで、かつ発達障害のある子供たち、軽
度知的障害のある子供たちとの関わりがすごく多いです。なので、そういった視点から今
日はお話を聞かせていただいたのです。

質問として、先ほどユースソーシャルワーカーなどと連携していきたいみたいなお話が
あったのですけれども、そのほかに例えば学校の中で独自にこういう人は絶対配置してい
きたい、こういう専門家は確実に連携していきたいなど、先ほど西村先生もおっしゃっ
ていたように、担任の先生だけで抱えるのではなくて、学校だけで抱えるのではなくて、こ
ういうふうに連携していきたい。また、地域という言葉も入っておられたので、既に想定
されている連携先だったり、専門家だったり、そういった方がいらっしゃるのか。もしく
は、そういったところも含めて今検討中なのか教えていただけますか。

【石田校長】 まず二つ。学習面につきましては、不登校の時期に遅れが生じている可
能性があるので、これは教育庁指導部の事業ですけれども、校内寺子屋という形で授業は
マスゾーンを対応していくのですが、そこにもついていけない子供たちのために放課後の学
習の場を校内に設ける。できれば、ユースソーシャルワーカーの方が見取りながら更にそ
こにつなげていく。ここは少しというところはこれからまた考えていかなければいけない。
一方で、すごく勉強はできるけれども人間関係でうまくいかないパターンの子たちには、
商品名は言えないのですが、デジタル動画コンテンツをうまく使いながら授業でマスゾ
ーンを押さえて、上のほうと下のほうはそういった形で押さえていきたいところです。ただ、

いろいろ教えていく中で、その子はどこが分かっていないのかと見取るのはやはり人が必要だというふうには思っています。こういった点で学力、勉強の面では押さえていきたいというのが一つ。

もう一つは、近くに都立立川学園という聴覚障害と知的障害を併設している特別支援学校があります。その校長先生とお話しているのは、私たちは、三つの系列のうち生活文化系列というのは、インクルーシブ教育も含めて、聴覚障害のある同学年の高等部がありますので、そういった子たちと協力者が手話をお互いに教えてもらう。手話で表現をする。こちらのもし分かっている勉強があればそちらもやっていきたい。そんな連携は少しアイデアレベルでは考えています。

私に構わず言ってくださいね。少し違うよというならそれで構わないです。遠慮なく言ってください。

【三宅主幹教諭】 校内通級の取組は、明日説明しに来ていただいて、取り入れていけるよう検討する予定です。

【野口委員】 通級設置予定ですか。ありがとうございます。

【横田委員】 横田と申します。E S DやSDG sの普及を通じた持続可能な地域づくりなどに取り組んでいます。

質問させていただきたいのですが、実際に今不登校である人のバックグラウンドや原因がすごく様々とおっしゃっていたのですが、経営者や委員の方々、教員の中に不登校を経験している方がどの程度いらっしゃるのかなと思いました。もしいらっしゃらないのであれば、そういった方々の声を吸い上げるのにどんなことをされているのか伺えればと思いました。

【石田校長】 西村先生、お願いします。

【西村主幹教諭】 私、中学校3年のうちの6か月も行かなかったなという感じで、2年半ぐらい本当に家で引き籠もっておりました。自分の人生でたまたま教員になれたのですけれども、石田校長にも校内で話したとき、不登校の子というふうに話題になったときに、ステレオタイプをつくって分かったつもりになるのが一番よくないと思っています。例えば不登校の家の子は家庭環境が不遇なのだよと決めつけても、そうでない子もいるのですね。結構裕福だったり、両親がしっかりされていてみたいパターンもあるし、それぞれなのです。現象として学校に来られていないことが出てきているのはみんな共通している。学校に来られない背景は何だろうかといったときにそれぞれ、勉強が全然分から

ないパターンもあるだろうし、対人的な恐怖心があるようなパターンもあるだろうし、起立性調節障害など体調的な病気が背景にあるような場合もあつたりします。できるだけ先入観を持たずに、どのパターンが来ても対応できるようにしておくのが学校や教師には大事かなと私は思っています。それを、こうだったらきつとこうだみたいに決めつけたら、そのパターンのときは対応できるけれども、違うパターンが来たときにもう自分としては理解不可能な世界になるのかなと思うので、そこをできるだけ広く構える。何らかの背景があつて来られていない。だから、その背景に応じた手だてをいろいろとどう対応できるか模索していくことができたらと思っています。私はそういう考えです。

【石田校長】 全体でどれくらい不登校の経験のある教員がいるという調査はしていないので分からないですけども、たまたまうちのスタッフに西村がいたので話を振らせてもらいました。

【澤岡委員】 公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団という超高齢社会のコミュニティづくりみたいな、人のつながりや活動の場づくりを研究している研究者になります。今日お話いただいたことは恐らく私の専門外ではあるのですが、2点御質問させていただきたいと思いました。

1点目は、やはり地域との連携はすごく重要な要素になってくるのかなというふうには思います。その中で、特に地域活動をやっている重鎮のシニアの方々とお話ししていると、あの方々の世代は、不登校というのは何か不良や、ステレオタイプの極みみたいなどころで決めつけようとする方々が良識ある人々の中でも多いように感じているのですが、学生たちがせっかくやる気を出して学校に来ている中で、地域を通ってくる子たちに、地域の方々がこそこそ何か言っていたりというようなことがあると、その子たちのせっかく前に向いた気持ちがそがれてしまったりするのかなという意味で、地域連携のまずベースですよ。今の不登校の子たちの置かれている状況も多様とおっしゃってくださっていましたけれども、地域の方々がそういったことを一緒に学ぶ機会、開校までの期間にそういうプロセスは何か考えていらっしゃるのかなというのが1点目です。

それから、2点目のお話として、地域で今、社会福祉協議会と一緒にボランティア講座などをやりますと、通信制のボランティア部の子たち——結構前向きな子だとは思いますが、学校に行くのは嫌だなということで通信制に行かれて、今ボランティア部に入っている子たちが先生に連れられて一緒に来ています。最初は口も利けなくて下を向いていた子たちが、子供食堂で90歳のおばあちゃま方から、「よく来たわね。あんた方が手伝っ

てくれたら本当にうれしいわ」と褒められてどんどん輝いていく姿などを見ると、家だけでなく、学校もすごく安住の地になったらすてきだと思うのですけれども、学校を自分の一つの選択肢と考えられるようになる瞬間があると気持ちが少し前に向いたりということもあの子たちから教えられています。そう考えると、学校以外で、家以外で居られる居場所づくりも何かつなげていったり。さっきもそんなことをおっしゃっていたのかなと思うのですが、学校という匂いのしないような三つ目の居場所に子供たちをつなげていくことも積極的に学校の中でやられていくのかなと、そんなことを少し教えていただけたらと思います。

よろしくをお願いします。

【石田校長】 では、まず二つ頂いたところで一つ目は理解のプロセスですかね。こちらからは、もちろん私たち、令和7年度の開校までには、例えば地域の商工会議所に2年次でインターンシップを希望制で取り入れたいとは考えています。また、ボランティアをやっていくのは総合学科の中ですごく大きな位置ですので、そういった形で、学校の敷地内ではなくて、できる限り地域に出て行って実践的な学びをやってもらいたい、キャリア教育をやってもらいたいというふうには考えています。我々も説明に行くし、生徒が入学してきたところで教員と生徒と一緒にやって、背景の言えるレベルは言って、でも、一緒に活動していきながら地域の方とも手を携えて子供たちを育てていくことはやっていきたいと考えています。これが一つ目の回答になるかと思います。

二つ目ですが、まだアイデアレベルですけれども、ラウンジ——学校の中に円卓というのですか、本当にお茶でも飲みながら話をできるようなすてきな場所を今造ってもらっているのです。さっきのゲーム理論ではないですけれども、例えば麻雀を生徒と一緒にやろう、トランプゲームと一緒にやろう、そういったところに地域の経験豊かな方に来ていただいて、家庭と生徒、学校と生徒だけでなく、本当に地域の何ともない斜めの関係の方が来ていてしゃべっていく中で、「ああ、学校って本当に一部分なんだ」というところが理解できるような仕掛けは少しやっていきたいと思っています。

回答はいいでしょうか。

【澤岡委員】 ありがとうございます。すごくすてきななと思いました。スマホを使えなくて困っている地域のシニアの方々向けにスマホサロンをいろいろなところでやっているのですけれども、この間、町田市に伺ったときには高校生のボランティア部の子供たちが教えていました。あの子たちは学校へ行けて楽しく学校生活を送っている子供たちだとは思

うのですけれども、GPTについてや、「今はもうLINEなんて使わないんですよ」と、ミニ15分講座で自分たちのパワーポイントやいろいろなものを駆使しておじいちゃん、おばあちゃんに教えていて、おじいちゃん、おばあちゃんにふだんだったらそういうことに興味はなさそうなのですけれども、孫世代が一生懸命教えてくれるのを応援するかのよ
うに、「ああ、そうなんだね」みたいなどころですごく若者たちが輝いている姿があつて、シニアもすごくうれしそうで、地域のスマホの課題解決にもなっています。もしかしたら
学内に定期的にシニアの方々が通つてきて、お気に入りの若者を応援する推しみたいなこ
とができてくるとすごく良い地域の循環ができてくるだろうなと勝手に想像しております。

【石田校長】 是非そういった形にしていきたいなと思っています。

【松山委員】 今の澤岡委員の質問と一部かぶる部分もあるのですけれども、私は松山
と申しまして、企業の中で社会貢献の推進をする部門におります。キャリア教育において
社員を派遣したり、NPO連携をしたり、そういうことをやっております。

今キャリア教育というところが一つの重点的な、しかも不登校経験のある生徒に対応し
た体験的で実践的なキャリア教育が一つの大きな課題だとおっしゃっていたと思います。
その中で、私も今の会社とは違う前職などで、企業として高校生の社会的・職業的自立支
援プログラムなどに協力させていただいたりしたことがあったのですけれども、そのとき
に行く学校の状況だったりバックグラウンドによって、企業側としても、例えば派遣する
社員も、ただ単に成功体験だけ、華々しいところだけを話して、いかにも順風満帆なもの
だけをやってきた社員がチャレンジスクールみたいなどころに行つて話してもあまり響か
なかつたりすると思います。どういう学校で、どういうバックグラウンドがあつて、どう
いう社員をそこへ派遣するか、どういう話をするかというのは学校と結構綿密に連携して
いました。実際そういうことが必要なのだと思うと、学校側でもそういった設計はかなり
綿密にやる必要があるのかなと思つたときに、体制といいますか、さっきカウンセラーや
ユースソーシャルワーカーの方という話もあったのですけれども、キャリア教育などで特
別にコーディネーターの方やNPO連携や、そういったことを今後やっていかれたりする
予定や、必要についてどうお考えなのかお伺いしたいと思つました。

【石田校長】 私のほうも是非お話ししたいと思うのは、フードドライブや服の再利用
といった形で、本当は生徒が直接利益を被つてはいけなかもしれないのですけれども、そ
ういった関わり方は是非やらせてもらえればと思います。彼が前にいた都立八王子拓真高
等学校は、食べるのが厳しい子は……。

【西村主幹教諭】 フードバンクの方に協力していただいて、週1回ぐらい食料配布みたいな感じで、そんな大したものではないのですけれども、パンなど、そういうことはやっていた。

【石田校長】 それをもらうパターンと、逆に服を、例えば古着というのですか、もう使わなくなったものを集めて、それをまた循環させていく。そういったところに関わりをさせていく中で、社会はこうやって動いているのだというのも経験させたいとは思っています。もしかしてそこからさっきの観点かもしれないですが、まだ生徒はいないのですけれども、あの子たちなりに絶対気付くところがあると思うのです。それを表現させて、それを例えば仕事にしていく、活動にしていくところに手を入れていきたいと思っています。自分たちでアイデアをいろいろ持ち寄りながら仕事をやっていた、何かの活動をしていた人がもし講師などに来ていただけると、よくあるパターンではなくて、自由な発想から何かを生み出すところは経験させていきたいというふうには思っています。

【松山委員】 そうすると、設計や、どういう団体、どういう企業と接点を持つかというのが結構大変といえますか、それはそれで専任のコーディネーターや何かそういうのが必要になってくるのかなと思いつつ伺っていました。

【主任社会教育主事】 その点については、校長にも提案したのですけれども、こうやって審議会などで話すと同時に、生涯学習課自体が学校支援の機能は持っているかと思うので、その辺は、教育課程をつくっていく、その後の学校運営のところに関しては是非御協力させてほしいと申し上げているところです。だから、コーディネーターはうちの課でも是非務めたいと思っていますし、立川市はいろいろな社会資源が豊富です。例えば立川市社会福祉協議会などは元来、昔から学校の支援に関してものすごく力を入れたいと思っているところで、駅の反対側にはなってしまうのですが、そこに学校との連携や、それとともに地域と結び付けてくれる。例えば高齢者のグループや障害のある人のグループなどのリンクをしていくのだったら、我々のほうで立川市社会福祉協議会と学校をまずつなぐ。認定NPO法人育て上げネットも近くにあたりますので、若者の就労支援やサポートステーションともつなげることはできるでしょうし。学校の先生たちだけでは十分対応できない。先ほどの三宅先生の話もありましたけれども、そういう資源が地域にあるというのは、仕事柄、知る機会も少ないと思いますので、その辺のお手伝いは我が課としてもバックアップしていきたいということもあって、今日お招きした次第です。

【竹田委員】 一般社団法人ウィルドアの竹田と申します。総合的な探究の時間のサポ

ートであったり、ほかの学校の総合学科でも少しお手伝いさせていただきまして、正に先生方のおっしゃるコンセプトにとっても共感です。私たちがやっていることも、学びたい生徒がもっと学べるように、いろいろな課外にある資源と学校の中がつながりやすくするための放課後のイベントを企画したり、課外のイベントの合同説明会を開いたり、そういった形で生徒一人一人が学べる場をつくる活動をさせていただいております。

質問としては、今なかった視点として最後の進路といいますか、出口のところも生徒を集める上ですごく意識されてくる立場なのかなと思っています。たまたま都立世田谷泉高等学校の卒業生がうちでインターンしていることもあって定時制のイメージを少しだけ持っていたりもするのです。たまたまその子は総合型選抜で大学へ行けて、今すごく学びたいことが学んでいる子だったのですけれども、その子が言うには、なかなかそういう子ばかりではない。キャリア教育はすごく大事だというので、うちでインターンをしている子です。そこも進路多様校で、就職の子もいれば、大学へ行く子もいる。そのあたり、あえてゲームデザインやそういうことをやっている総合的な探究の学習の時間になっていって、それが総合型選抜につながって大学にも行けるようになる。そういうことも描けるような気もしたのですが、そのあたりはどういうふうに今、目標であったり、お考えになっているところを質問したいと思いました。

【石田校長】 正に今おっしゃっていただいた、自分がやりたいことが仕事になっていけばいいといったところを私は前面にやっていきたいかなと思うのです。というのは、私の知り合いもチャレンジスクールなどに行って名前の通った大学に入った。でも、そこで結局大学に行かなくなる。それは本末転倒だろうというところがやはり私の中にあるので、自分が社会にとって何が貢献できるのか、関われるのか、自分は必要なのだと。有用感というのですか。そういったところを持たせて、だから、この大学へ行こう、この専門学校へ行こう、ここに就職しようといったところをキャリア教育で一本、そこは軸を外さないでやりたいとは思っています。

【竹田委員】 その多様性といいますか、チャレンジスクールだから海外大学に行けないなど、極論ですけれども、そういう偏見を持つとなかなかもったいない生徒が出てくるなどいろいろな学校を見ていて感じますので、その多様性が担保できるとすごく面白くなりそうだと思います。

【石田校長】 それで今2人に、ある意味、一緒になってつくっているのは、自分の考えなどを、言葉、文字、身体表現でもいいのでアウトプットするトレーニングを、言葉は

あれですけれども、教科の中で一貫してやろうと。私たちはチャレンジ設定科目を本当に自由につくれるので、ここに論理的に表現する。社会で何が起きている。こういった文字はどういうことなの。例えば円安・ドル高はどういうことなの。そういったのを学んだり、自分の言葉で文字にして、作文、論文を作っていくところを3か年、4か年で計画的に育てていきたいと思いますという教育課程は絶対つくってねということで、今一緒にかんかんがくがくしながらつくっていています。アウトプットできる力というところだけはやっています。それが総合型選抜につながるのだったらつながればいいし、就職の面接につながるのだったらそれはそれでいい。いずれにしても自分の考えをアウトプットするところは軸に置きたいと思います。

【竹田委員】 先ほどの松山委員の話にもつながりますが、やはり外部が入るときに、その子が何をしたいのか。一度しか会えないので、言葉にしてもらえると、こんなことをやってみれば、こういう機会があるよ、あそこへ行ってみればにつながる。それがないから、もやもやしてお互いに終わってしまう。正に表現する力というのはものすごく大事だと私も思ったところでした。

質問は以上です。

【笹井会長】 ありがとうございます。

それでは、先ほどもコーディネーターという形が望ましいとある種の提案などがあったのだけれども、続いて審議といいたいでしょうか、御意見、あるいは教育委員会なり民間セクターからの支援というか、御提案というか、そういうものを少し意見交換したいと思います。質問も含めて、幅広く御意見と御提案があればお願いしたいと思います。

【野口委員】 多様な道が子供たちが知るといふふうにならなくて、それはすごく大事だなと思っています。私が接している子供たちは、大人もそうなのですが、不登校になって、ずっと30年ぐらいひきこもって、その後ようやく就職しようという気持ちになって就労支援に行きました。就労支援で働いたこともあるのですが、大人になって発達障害が分かりましたという方だったり、少年院や刑務所の方なども、一回生活保護を受給して、徐々に準備して行って、体調を調べてから就職をこういうふうにしていました。そういう人もいたり、やはり人生はいろいろあると思うので、高等学校を卒業してすぐに就職して、大学へ行ってストレートにきれいな道を歩める人のほうが少ないと思うので、そういう意味ではいろいろなロールモデルを示していただけるとすごくいいと思います。

その中で、私はやはり障害のある方と接することが多いので、すごく感じるのは、自分が持っている権利を知らないというか、生活保護をこういうふうにしたら受給していいのだとか、障害のある方だったらこういった就労支援を受けることができる。せつかなので、そういうことなども知る機会があるといいのかなと思います。毎日同じ生活をしているけれども幸せだという人もいるわけで、すごく活躍しなくてもいい。高校生は何者かにならなければと思っている子が多いと思うのですけれども、そうでなくていい、いろいろな人生があるのだということを知っていただけるといいのかなと思ったのが一つ。

あとは、先ほどいろいろな専門家の方に関わっていただいたり、学習面だと寺子屋をされたり、デジタルコンテンツが使われたり、すごくすばらしいと思っています。そういう意味では、校内の特別支援の体制も是非先駆的な形で取り組んでいただけるとうれしいと思います。具体的には、例えば特別支援教育コーディネーターを専任で配置したり、それも複数配置したり。私は大阪府の高等学校と関わることも結構あるのですけれども、例えば、高等学校に入りたての段階はどうしても不登校の子たちはすぐに来られない子がほとんどだと思うので、初めはまず少人数から始めて、少人数学級みたいなものをつくって、そこから徐々に移行していこうというやり方をしているところがあったり。そういう具体的な不登校の像を想定した上で、いろいろなステップがあると思うので、いろいろなステップを想定して校内の体制をつくっていいと思います。先ほど特別支援学校との連携もされるということでしたので、是非センター的機能として特別支援学校を活用していただいて、校内通級も設置される予定ということですので、綿密に個別の教育支援計画などもつくっていただいて、その後の進路にも引き継いでいていただけるような体制をつくっていただけると、そこに行ってもらいたいなという子が今既にたくさん浮かんでおりますので、是非そういった形で校内の体制を特別支援教育という観点で調べていていただけるとありがたいと思いました。

【石田校長】 正にさっき出てこなかった言葉がアセスメントです。イメージは、アセスメントをしっかりやって、何が最適なのかをしっかりと考えてやっていきたい。それをいろいろな方法の中から組み立ててプログラムしていくのはやっていきたいと思います。また、自立支援コーディネーターであったり、特別支援コーディネーター、スクールカウンセラーであったりというのは、仕分けは違うのですけれども、いますので、そこでつくっていきながら、基本的にケース会議は毎週やるつもりです。それで個別でやっていく形は一貫してやりたいと思っています。やっと出てきました、アセスメントという言葉です。

【野口委員】 いろいろな人が校内にいることがすごく重要だと思っていて、この間、少年院から出たばかりの子と話していたら、高校生でドロップアウトして少年院に行った子ですけども、少年院に行って初めて、人と相談するのは良いことだと気付いたと言うのですね。何でこれまで相談しようと思わなかったのと聞いたら、担任の先生などは近過ぎてしまって、自分が相談してしまったら、この子はそういう子だとずっと見られるのが嫌だというのがある。別に担任の先生が悪いわけではないのだけれども、校内でほかに相談できる人がいなかったみたいなことをすごく言っていました。そういう意味では、担任の先生以外のつながりを校内でたくさんつくっておく。特別支援教育コーディネーターでもいいですし、ユースソーシャルワーカーでもいいですし、そういったつながりがたくさんあることがすごく大事なのだと思います。

【石田校長】 それプラス・サードプレイスで、おじいちゃん、おばあちゃんにぼろぼろとしゃべっているところが回り回って、そういうことかと教員も理解できることもあるので、是非いろいろな面から言葉を拾い上げて、アセスメントしたものについては、今度校内でデータ蓄積していくところは何とかつくり上げたい。ビッグデータと言うのか分からないですけども、データベース化していくところは来年度からつくっていきたいとは思っています。

【野口委員】 すばらしいと思います。ケース会議などをやってもばらばらになってしまっている学校がほとんどなので、それが全部蓄積されていく。かつ、それとセットでできれば、その子の成績だったり、これまでの遅刻・欠席の状況だったりが一元化されるとその後にも非常につながっていくかなと思いますので、是非是非お願いします。

【主任社会教育主事】 今、野口委員の御指摘の点に関して、基本的にはユースソーシャルワーカーを厚めに配置しようと考えているのですね。まだ学校と詳しく話してはいないのですが、我々も個に応じた支援が一番重要で、入学段階からの個別アセスメントをしていけるシートなどを今開発しているのです。それをクラウド上で共有できる都立学校「自立支援チーム」情報共有管理システムをこの秋稼働させますので、そういったものを学校に取り入れてもらって、個に応じた支援、その子その子独自に応じた支援の在り方、関わり方の在り方をユースソーシャルワーカーが学校と一緒にしていけたらというふうな構想を考えていることと、就労支援においても、今、都立高等学校に軽度知的の生徒が入ってきたり発達障害の生徒が入ってくることはもう驚くことではない状態になってくるので、そういった分野で就労支援に携わっているユースソーシャルワーカーもいます。ユ-

ソーシャルワーカーには福祉の専門家と就労支援の専門家といるので、その辺のバランスも考えながら適材適所にうまく。都立八王子拓真高等学校などだと去年ぐらいから進路指導部に入れていただいたりしています。いわゆる保健相談だけではなくて、進路指導のところにもユースソーシャルワーカーを活用して、先生たちだけではなかなか手に負えない部分はフォローしていこうと基本的に考えているところです。

補足は以上です。

【広石委員】 幾つかありますけれども、一つ目として、先ほど、例えば立川市教育委員会の皆さんが、不登校になった理由は何ですかと聞くと、無気力と不安ですとおっしゃっていて、そうなのだという話をおっしゃっていたのですけれども、だから学校に行けなくなるわけですね。つまり、学校という状況に対して自分は無気力的に関わるしかないとなったような子が不登校になるのだと思います。だから、無気力・不安なので、どうやって気力を起こすか、関心を持たせるか、不安を解消させるかではないのではないかと思います。その背景的な、何で不登校なのか。無気力・不安という言葉で、「そうか」と理由をまとめてしまうこと自体はすごく危険なことだと、一つはそれがすごくあると私は思いました。

逆に言うと、変な話、朝の決められた時間に行って、文句を言わないでずっと授業を聞いて、きちんと受験勉強をして、期末試験の前の勉強をしてきちんと成績を取ること自体が無気力なのではないかと私などは思うわけです。そういう発想がすごく大事だと私は思っています。例えばマイクロソフトという会社がある。マイクロソフトはOfficeというソフトをつくっています。Officeを広めたいので、Macユーザーにも使ってほしいわけです。マイクロソフトの中にはアップル製品用のOfficeをつくるチームがある。そうすると、アップルが好きな人はマイクロソフトのことは嫌いなわけですよ。その部屋に入ると、くたばれマイクロソフト、Windowsはカスだと書いてあって、アップル最高、全部アップル製品しか使わない。アップルユーザーはどういうふうを考えているのか、どういう価値観なのか、アップルの人たちはどういうふうにWindowsを見ているのか。そちら側の視点に立って改めて見てみないとアップルのユーザーにマイクロソフトの製品を使ってもらえないので、そのチームは徹底的にアップル側に寄せると。

何が言いたいかというと、さっき御指摘があったみたいに、不登校の側に立った教育とは何かというところが私は一つ考えどころだと思うのです。むしろ、「そうだよね。既存

の学校制度や仕組みや先生のコミュニケーションや生活指導だと何も言う気がなくなるよね」というところにすごく寄り添うというか、そういう教育体系とは何か。それが一つのオルタナティブな教育の形であり、逆にそれを丁寧に考えることが今の学校を本質的に見直す大きなポイントになっていくだろうと思います。

私たちが会社の支援をしていると、アジャイル開発——ソフトウェアで、昔はきちんと計画を決めて最終的にしっかりつくり切ることが重要だったのですが、最近は、少しテスト的なものをつくってみて、使ってみてもらって、改修しながらつくっていく進め方が大事だと言われているのです。実は大手のしっかりしたシステム会社にいた人ほどそれができないのです。なぜかという、少しトライしてみて、ミスった、間違えたところを力に変えて、改修してより良くなっていく。そういう動き方自体を小さいときの学校教育からやったことがない。間違わないように計画をつくって、決められたとおりのスケジュールできちんと自分はクリアしてきましたということが一番良いことで、特に大手システム会社に入ったような人はそういうのが優秀だからそこにいるのですね。逆に言うと、ベンチャーなど本当に謎の若者たちがやっているところは、すぐつくってみて、「おい、大丈夫かよ？」みたいな感じで動けてしまう。今の日本社会の抱えている教育的な課題の一つは、「今の学校にきちんと行けている子はやばくね？」というところ。私たちがみたいな企業支援やベンチャー支援をしていると、「めっちゃやばい」と思うところがあるのですよ。

別に不登校の子が正しいと言いたいわけではなくて、もしかしたら既存の学校という制度の課題にいち早く気付いている子かもしれないし、既存の学校という制度で対応できないことをある意味でアラートを出してくれている存在なのかもしれない。チャレンジスクールに来る子たちは、かわいそうな子たち、取り残されている子たちではなくて、むしろ新しいタイプの子たち。10年前、昔の定時制高等学校とも違い、また、15年前、20年前の不登校対策とは違う時代に来ている。そこがすごく大きな課題なのかなと思います。先ほどの無気力と不安が原因ですとつい言うてしまうではないですか。でも、そのあたりを先生方が例えばこういう場でも、「そうじゃないですよ、そういうふうに思いがちだけれども、違うんだよ」ということを発信していただくと、さっき澤岡委員がおっしゃっていた地域の皆さんにも、学校に行けなかった子たちがここに集まっていて、少しやばい子たちが来ているのではなくて、こういうタイプの子がいるのですと対外的に発信していくことが今のチャレンジスクールとして非常に必要なことではないかと、さっきのお話を聞

いていて思ったのが一つ目です。

二つ目は、先ほどアウトプットする教育をすごく大事にするとおっしゃっていました。先ほどの話ともつながるのですけれども、私たちも会社の支援などいろいろなことをしていて感じるのは、あと学生などを見ていてすごく思うのですが、アウトプットしていいのだという経験なのですよね。能力の問題ではなくて、権利の問題。さっき野口委員がおっしゃった、自分はいろいろなサービスを使っていいのだという感じと一緒に、私は発言していい、思ったままのことを言っているのだと。例えば「髪の毛をピンク色にしたい」と言っているみたいな感じ。そういうことがすごく大事だと思います。つい我々も、地域づくりや社員研修でも、どううまく言わせるか、アウトプットさせるかみたいな感じになる。会社でアイデアコンテストがあるから出せ、出せと。よく相談を受けるのは、「アイデアコンテストをやれと言ってもなかなか出ないです、どうしたらいいですか、アイデアを考えさせる方法を教えてください」と。研修をやりと出てくるのは、みんなアイデアはある。でも、去年アイデアコンテストに出た先輩がアイデアを言ってみたらけちょんけちょんにけなされた。「この会社でアイデアを言うのはめっちゃやばいことなんだ」と、絶対言わないと思っている。そういう経験を多分してきているのです。それは小さい幼稚園ぐらい、もしかしたら家庭の中からそういう経験がずっと蓄積してきている子がいるとする。せっかく今プログラムをつくられているタイミングだということなので、うまく面白いことをやってアイデアを引き出すこともすごく大事ですけれども、小さいときからたまっている、正にアサーティブなコミュニケーションがずっと損なわれ続けてきた十何年を生きてきた子たちはどういう存在なのかというところを改めて見ていくことはすごく大事だなと思いました。

おっしゃっている一つ一つの内容は本当にすばらしいと思っています。でも、野口委員がおっしゃったみたいに、刑務所に行って初めて、「俺の話を聞いてくれる人がいる。人生に相談でありなんだ」と思ったという経験をしている。だから、逆に学校でうまく相談できないし、選択肢としてコミュニケーションを拒絶する形になっていくパターンも多いのだろうと。もちろんすごく検討されているのはよく分かっているのですけれども、そのアウトプットに対しても更に深めていただくと、本音をしゃべるのは実はすごく難しい。本当に日本の会社員をたくさん見れば見るほど難しいです。逆に学校に適応してしまっている人ほど難しくなる現状があるというのも含めて、少し考える必要があるというのが二つ目。

もう一つ、似て非なる話ですけれども、私は慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスで教えているのです。あそこはAO入試のある意味で変な子が集まっているのですけれども、珍しい経験をした子が割と集まるようなところですよ。そういうところで私もソーシャルビジネスの授業をしていると、「うちの会社では」というような会話をみんなしているのですね。意外と、「高校時代から会社をやっている4社目です」と20歳ぐらいの子がさらっと言ったり。「先生、すみません。後半は授業に出られません。スペインリーグでサッカーで戦っていて、シーズンが少し延びて日本に帰れないので授業に出られません」みたいな子や、芸能活動をしている子もいます。「先生、モデルの仕事が急に入って、ここはいいません」みたいな子も結構いるのです。だから、割と18歳、19歳でもいろいろな形で社会的な活動をしている。従来の順番に行った子たちとは少し違うタイプの子も来る学校だからこそ、逆にそういう子たちの姿などを見ていたりするところもあるのです。逆に言うと、さっきの進路や出口のところもいろいろなことがある。さっきの不登校になる理由なども、もしかしたらそういうような子たちもいるかもしれない。アイドル活動していくためになかなか学校に行けない。芸能の学校などもありますけれども、なかなかそういうところとうまくいかない子たちもいるのかなと思ったりします。都立高等学校は二十何種類もあると伺っていますけれども、それだけすごく幅が広がっているし、10代というものの位置づけ方もすごく変わってきていたりする。さっきの起業も、中学時代に会社をつくったり高校時代につくって、M i n e c r a f t でゲームを使ってSDGsを考えるようなソフトをつくって販売していた子もいる。意外と悩んでいて、18歳の子が、「うちのチームは40歳、50歳のおじさんたちがいっぱいいて、社員としてマネジメントをどうするのか悩んでいます」と。だから、すごく面白いなと思います。

それとチャレンジスクールは実は表裏一体みたいなところがあって、いわゆる昔的な学校の優等生とは違うライフスタイルや動き方をしている子たちがいっぱいいる。すごく良い先輩たちもいっただろうし、実は人生はいろいろなパターンがある。意外と若い世代のほうが多様性が高まっているかもしれないと思うのです。例えば10代でLGBTでモデルをやっている子の姿はすごく良いと思います。ついキャリア教育で上を見るというか、順番に大学を出て、社会人になって、こうなってというのがキャリア教育と思いがちなのですけれども、意外と横のキャリア教育。

一方で、私たちががスポーツも関わっていると、高等学校もずっとスポーツ推薦で来た子がけがをして出られなくなって、それで学校へ行けなくなった子もいる。今いろいろ多様

な子が10代ではいるので、不登校に多様性が出てきているところもおっしゃったとおりです。10代の多様な生き方を、この学校だけで全てを抱えるわけではないですけれども、逆にチャレンジスクールができることによって——今、不登校の理由はすごくいっぱいある。10代の子たちは社会環境の中で、私たちが思っている高校生らしさみたいなものとは違うような世界が実はすごくいっぱい展開されている。それに対していっぱいいろいろな課題があって、既存の社会制度が対応できていないところもある。一方で、そういうところをしっかりと知ることがいろいろな生きづらい子にとって可能性を広げる。さっきの刑務所を出て、帰ってきてまたいろいろなことをやっている子たちも含めているのだよと。そういったところがある意味でチャレンジスクールという存在を通して社会的に共有が広がっていくと、それはただ単に学校の中でどうやるかだけではなく、そういう子たちを社会としてどう受け入れていくのかという推進力にもなると思いました。

すみません。いろいろ言いたいことをしゃべってしまいましたが。

【笹井会長】 まず初めに、広石委員がおっしゃったステレオタイプ的な見方、そういうのはよくないよね。それを超えるような指導などが必要ではないかというお話、その辺はどうですか。

【石田校長】 正に、枠ではなくて、方向性だけ決めていくような授業のつくり方を極力お願いしたいと考えています。今それをベースにつくっていて、例えば不登校の子たちがつくった人生ゲーム、ああいう感じを、実際に教える先生たちをマインドリセットしていくのが私の役割だと。まずありのままにこの子たちがアウトプットしたのを受け入れて、考えを聞いて引き出してあげるまで待てと。最初に答えを言わない。だって、その子なりに考えていることがあるというのを出してから、求めることに対して補完をしていくような指導方針を入れています。先にルールを敷くなというのが一つ。

もう一つは、マインドリセットで必ず言おうかなと思っているのは、今このメンバーにも言っているのですけれども、発明王のエジソンだって学校不適應でしたよね。でも、社会貢献の度合いを考えたらとてつもないでしょう。だから、私たちは幅広く受け入れて、受け入れた子たちは何か生まれてきた意味があるのだから、それを気付かせてあげることに関わっていくような考え方でいてねという方向性だけは押さえていこうかと思っています。

【広石委員】 よく問いをつくる授業があって、あれに対して既存の学校の先生方はすごく抵抗感があると。教師が問いをつくって生徒が解くのだという発想を皆さんすごくお

持ちです。でも、生徒が問うことに対して先生と一緒に考える。そういう関係性に慣れていない先生方が世の中に多いので、そういう面白さですね。さっきのアウトプットというところも含めて、そういうのができるといいので、おっしゃったみたいな形を良い形で軸としていただければすごくいいなと思います。

【石田校長】 学校設定科目にアルバイトを入れます。あれは社会とつながってもらいたいので、アルバイトを単位認定していく。その代わり、さっきの四つの力のうち、自分は何を伸ばすことができたかというのだけ、言葉でもいいし、文章でもいいし、身体表現でもいいのですけれども、ラーメンのお湯切りができた、こういうテクニックが必要なのだというのをきちんと報告してくれればオーケーと。かなり柔軟にやっていきたいと思えます。その子にとってプラスになったらいいよ。それぐらいの考え方です。

合っていますでしょうか。

【三宅主幹教諭】 学校設定科目ではなかったと……。

【石田校長】 こういう良い部下なのですよ。

【三宅主幹教諭】 学校外の学修の増単という形です。

【石田校長】 優秀なスタッフです。

【笹井会長】 分かりました。

もう一つ、広石委員がおっしゃったのは、例えば多様な学生がいて多様な生き方が当然あっていいわけですが、一元的に路線が決められたところからはみ出した人は結構そういう考え方を持つだけでも、そういう多様な生き方、考え方を受け入れて伸ばしてあげるといような教育ですよ。

【広石委員】 いろいろな人生観ですね。皆さんがおっしゃられたこともあると思えますけれども。

【笹井会長】 そういう教育というのは、今までの説明でも大分言われていたと思えますけれども、もし加えて何か工夫する点等がありましたらと思いますが、いかがですか。

【石田校長】 いろいろなことがあって、どれから言おうかな。ただ、本当に大きな方向性としてそれはやりたいというところで思い付くのは何かある。私ばかりしゃべっているから。

【西村主幹教諭】 私が広石委員のお話を聞いていて思ったのは、入り口は普通っぽくしておいたほうがいいなと思っています。不登校の子たちは取り戻したい気持ちがすごくあるのです。失った中学校生活や、ほかの子ができたはずの中学校生活を自分は何らか

の理由でできなかった。だから、普通に戻らなくてとはと。すごく固定化した日本的な教育の価値みたいなものがいろいろな世代に浸透していて、それを失ったことはよくないことだというのは何となくひしひしと感じているわけです。そうか、大事な中学校生活に私は行かなかった。何とか高校からそれを取り戻さなければ。でも、既に中学校へ行けなかったことで、同じような負荷はもう耐えられないかもしれないけれども、一生懸命取り戻そうとする。入り口の段階では取り戻そうというつもりで高校に来てもいいけれども、3年、4年このチャレンジスクールで過ごしたら、何かあのときはそれにこだわっていたけれども、そんなことにこだわらなくて、こういういろいろなことを最初からやればよかったなみたいに思える高校生活になるように。だから、入り口は少し普通っぽい顔をしているけれども、中に入ってみたら多様な選択科目があって、いろいろな先輩が来て話をして、出ていくときには少し価値観が変わったかもみたいな感じで卒業できるとチャレンジスクールとしての役割が果たせるのかなと思っています。

【広石委員】 逆に、いろいろなことに縛られているから学校に行けなくなるということがあるのだろうと思うので、それはすごく大事なところだと思います。

一つだけ追加で。せっかく学校のデザインをされているところで、私は食事をうまくデザインできないかと思うところがあります。給食というか、お昼と一緒に食べる経験や、夜間だと一緒に御飯を食べて夜の授業が始まる。コミュニケーションするきっかけや、人や社会との接点づくりで言うと、実は食はすごく大事ではないですか。もちろん授業やアルバイトもすごく大事ですけども、意外と学校の機能の中で、小学校だったら給食で皆さんと一緒に食べましょと。食事は何かうまく使えないのかなと前から思っていたので、今言っておきます。

【石田校長】 高校生レストランも少しやってみたいかなという話はしたけれども、どこまでできるのだろうと。

【広石委員】 そこまですごく凝ったものでなくてもよくて、みんなでコンビニの弁当でもいいかもしれないし、みんなで一緒に何かを作って食べるでもいいです。食と一緒にする経験は、例えば三部制だと食事が抜けるなと思ったのですね。高校時代でも一緒にパンを買って、うどんを食べて、そういう経験はさっきの取り戻したい学校生活の中の一つ大事なところかなと思ったので、食べることを通してコミュニケーションや友達ができる。先生もそこに来て一緒に食べていることが授業とは違うコミュニケーションを発生させる可能性もあるのではないかと思ったりもしたので、もしかしたら食というの何かあるの

ではないかなと思いました。

【石田校長】 アイデアとして、実は教室がない学校なのです。マイホームルームがなく、食事の時間帯はある意味でどこで食べてもいい。さっきのラウンジや中庭、そういったところでそれこそフリーで食べられる。

【広石委員】 そういう機能を逆にうまく使うというか、ただ忙しくて食べられないからそこで食べるというよりは、ラウンジなどでみんなで食べる。パーティーではないけれども、みんなで一緒に御飯を食べる。本当は今日議論したかったかもしれない学校内カフェみたいなのが必要だということも、お茶を飲む、少し何かを食べる空間を学校の中にどう組み込んでいくのかという議論だろうと思うので、チャレンジスクールなどにおいてもそういう機能を、例えばラウンジなどをうまく使う。そういったところが新しい教育の形として、特に人とのコミュニケーションや、自分で役割を見つけていって何かをする体験としての機会になり得るのではないかなと思いました。

というわけで、言い逃げみたいな感じになって、すみません。遅れて来て何を言っているかという感じも含めて、大変失礼ながら、時間があまして、本当にすみません。

【笹井会長】 ありがとうございます。

それでは、別の御意見や御提案がありましたら是非頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。どなたでも結構です。

【竹田委員】 先ほど進路の話もさせていただきましたけれども、広石委員の言葉をお借りすると、縦のキャリア教育もあれば横のキャリア教育もある。私自身の活動が、正に高校生といっても、部活動や塾などが今まで当たり前とすれば、実はそれだけではなくて、オンラインで全国の仲間と一緒にビジネスをつくってみる生徒もいれば、本当におじいちゃん、おばあちゃんが大好きで地域にどっぷり入っていく子もいる。いろいろな高校生活がある。いろいろな高校生活があっていいし、いろいろな高校生活を多くの子が知らないから選べなくて、当たり前部活動しかないと思込んでいるから部活動だけやっている。部活動になじめなくなってしまうと不登校になってしまう。そんな状態をどうすれば直せるかなと思ったときに、いろいろな先輩との出会い、いろいろな高校生活ができるサードプレイスのつながりがすごく肝になってきそうだなと話を伺いながら感じました。

私が先ほど例に出したうちのインターン生でたまたま手伝った子は、すごく英語に興味がある。でも、英語の授業の点数はめちゃくちゃ低い。しゃべることは大好きで、お母さんが海外に興味があるのか、家がホームステイ先になっている。海外の人とコミュニケー

ションを取っていく中で留学などもして大学に行く。そんなシナリオを持っている子ですけども、彼女を見ている、何か好きなものがある。でも、それが学校の中にはなかったり、地域にもなかったりする。それと出会えるサードプレイスといかに出会えるかというのがすごくポイントになりそうです。先生もサードプレイスとお話をされていました。ただ、学校の中のサードプレイスをつくるとともに、学校の外にあるサードプレイスとどうつなげていけるのか、そこは鍵になってきそうな感覚があります。

立川は都会なのか少し遠いのか絶妙な気もしますが、新宿だったらすぐに行ける。いわゆる学校、地域を超えたところに行けばいろいろなコミュニティがきっとあると思うので、時には、リスクはありますけれども、大学の学生団体やサークル活動などに参画する。例えばジェンダーに興味があって、大学生のサークル活動に参加している子なども見たことがあります。いわゆる高校生の枠を超えた出会いの場をつくっていけると面白そうだなと思いました。そのあたりの学校外、地域以外のリソースをどういうふうに捉えているかというところを是非ディスカッションさせていただきたいと思いました。

【笹井会長】 いかがですか、今のは。

【石田校長】 おっしゃるとおりで、それをつくっていききたいのです。だからこそ、本当にリアルに地域社会や、そうでなくても、大学生などでも、いろいろな場面でいろいろな考えの方に触れることによって、学校は生徒にとっては全てかもしれないですが、実はごく一部だったというところに気付いてもらいたいのです。それをどうやって仕掛けるかというのをこれから皆さんにいろいろ教えてもらって。

【竹田委員】 同じ問いを持っていると。

【石田校長】 なるほどと思いながら、我々も組織をどんどん変えてやっていきたいと思っています。是非そのパイプや方法などを御指南いただければ、また帰って考えたいと思っています。

【笹井会長】 主体性を育むとあります。結局、主体性というのは、他者とのコミュニケーションを通して自分を知ることができるわけですね。だから、他者が学校以外の場所にいる。全然異質の文化を持った人がいることで自分の違った側面も知ることができると思うので、竹田委員のNPOなどインターンシップに是非行っていただいて……。

【竹田委員】 同じ問いを追う者として、今ほかの学校でやらせていただいているので面白いと思うのは、起業したい高校生はいるのかいないのかという議論がありますけれども、とある学校だとアンケートで300人の中で30人ぐらいいたのです。その子たちは

出てこない。普通に生きていると、「うちの学校は起業など興味ないですよ」と先生方は言うのですけれども、アンケートを取ると30人はいる。その子たちにアプローチするために放課後にいろいろなイベントを毎週のようにやらせていただいています。あるときはジェンダーで集まってくる。あるときは芸人というテーマで集まってくる。そういう小さな入り口を学校の中につくっていく。

他校の事例で面白いと思うのは、地方の学校ですけれども、毎週昼休みの30分間に先生の手ついでで友達を呼んで、テレフォンショッキング的乗りで次につないでもらうということをやっている先生がいっぱいいます。毎週必ずお昼御飯の30分。定時制なので時間はどこがいいのか分かりませんが、要はみんなが比較的参加しやすい30分の枠に毎週誰かしらそこに話をしに来てくれる。そこで聞いているうちに、こういう人もいる、ああいう人もいるというのが分かってくる。授業ではどうしても枠が限られていて、その中で見せられることはすごく限られてきます。そして、生徒も強制的に見せられるので、準備する間もなく、使える冗談だけ考えて終わる、記憶にないとなるのではなくて、お昼御飯など選べる時間で、選んで行けるものがしょっちゅう学校の中にある。そうすると自分で選んで行けて、こんな人がいるのだ、会ってみよう。それは先生のつながりがあるから、もっと踏み込んでいきたい子は、「今度会いに行きます、その会社を見に行かせてください」と、そこにつなげていくというお話を聞いて、なるほどなど。そこはオンラインだからコストが低いという話ですけれども、東京だったら人はたくさんいるので、何の枠という表現がいいのか分かりませんが、もしかすると毎週授業でもない、そういう場所を。ラウンジで30分講演が行われる。今、総合学科の支援が東京都の生涯学習課としてもあるという話だったので、そういうのを使ってもいいのかもしれないし、もしあったら面白いなと思いました。

【石田校長】 今お話を頂いたところでよく言っているのは、私も最初はインターンシップを例えば2年生全員にやらせたいという思いがあると。いや、厳しいです。選択制がいい。自分で決めてやる。その選択制は、いろいろところで構築していく中で、我々が提供するよりも幾つかは用意する。何を選ぶかというのを極力前面に出してやっていきたいと思います。今答えではないのですけれども、選択制というところは我々はやっていきたいと思っています。

【竹田委員】 そういうところでは余白が一番大事だと思っています。いきなり何も無い、選択肢もないところからやれと言われても分からないので、選択はすごく大事だと思

っています。その先に、外れという言い方は失礼かもしれませんが、やはり良い意味の変な者がいますよね。私の変った者というのはリスペクトした者ですけれども、変人。地域のインターンでもいいし、さっきバイトでもいいという話があったので、ベンチャー企業でインターンをする子が現れてもいいのかもしれませんが。自分で会社をつくってしまう子がいてもいいのかもしれませんが。その選択と、更にその範囲を広げてくれる事例を迫っていくと真に多様というか、何でもいいの的的になってくるのではないかと。これは長い時間が必要かもしれませんが、そんな理想はないかとこだわりました。

【笹井会長】 ほかにどうでしょう。まだ発言されていない方、どんどん発言していただきたいと思います。

【澤岡委員】 1点、もし自分が不登校だったり、うちの小学校2年生の子供が今、「学校に自由がない」と毒づいて帰ってきて、もしかしたら、このままの路線で行くと、私は「学校へ行かなくてもいいよ」と言っている親なので、不登校になってしまったときには是非是非と思うくらいすてきな学校だと思うのですが、一方で少し気にかかるのは、先生方が全てやろうとされている。地域とのコーディネーションや、インターンに子供たちを出して、全部のことを先生方が背負おうとすると、敏感な子供たちが相手だけに先生方が破裂して大変なことになってしまうのではないかと不安に思ったりしました。そういう意味でも、先生方も素になれる、「先生も人なんだよ」と少しぼやける。息抜きができるような場所が先生方にも必要なのかなというところが一つ。

それから、さっきインターンシップの選択肢、選べるのはすごく大事というお話をしてくださっていましたが、その選択肢の中の一つに、周辺地域の町内会や自治会の活動も。選ぶ子は少ないと思うのですが、実際に大学の学生たちがインターンシップで町内会・自治会活動をやっているところを見ると、企業だと何かやってもそんなにすぐサービスが変わる、お客様の表情が見えてくることは少ないと思うのですが、地域は短い関わりでも何かをやると結構目の前でいろいろなことが大きく動く。自分が動くと何かが変わるというすごくドラマティックな体験ができるというワクワク感は地域ならではのところで、地域でのインターンも選択肢の一つ、二つとしてあるとよりいいのかなと改めて感じました。地域にとっても、若者たちが来てくれて新たなアイデアをもらえてよかった。今まで踏み込めなかったことが、若者たちに聞いてやはり必要だと分かって踏み出す勇気が出たと会長が新たな場づくりを始めたところもあります。お互いにとって良い相乗効果があるところで、地域という選択肢も積極的に取り入れていただけるとよいのかな

と改めて思いました。

ありがとうございます。

【笹井会長】 今の御意見はどうですか。

【石田校長】 正に最初に言っていた、アイデアを全て実現しようとする正言言ってパンクしてしまうだろう。それは私と今のメンバーの中で、何がベターな解なのか。ベストではないけれども何がベターなのかというのは、それこそスクラップ・アンド・ビルドを速いペースでやっていくのだろう。最初からすごく精度の高いものはできないと思うのですけれども、徐々に限られた時間、労力の中で最大効果を生むのは何かというのは探っていきたいので、そういった点からもまた継続してアドバイスを頂けるとすごくうれしいかなというのがまず一つです。

二つ目のことにつきましては、地域は、正におっしゃっていただいたところで、すぐ反応が分かりやすいので、是非、地域と連携したもろもろの活動は本当に具体的にしていこうとは思っています。すみません。まだこの段階の回答になってしまうのですけれども、よろしくをお願いします。

【竹田委員】 地域のところで最近見て面白いと思ったのは、レンタルJKという活動をしている子供たちがいます。言葉は怪しいのですけれども、決して怪しくありません。要は、地域のおばちゃんたちに「JKが行きますよ、何ができますか、レンタルします」と。何でしたか、レンタル……。

【野口委員】 レンタルなんもしない人。

【竹田委員】 そうなのが若者世代でかなりはやったことがあって、そのパクリでレンタルJKということらしいです。要は、何が面白いと思ったかということ、それを高校生が発案したというのが面白い事例としてあるのですけれども、もう一つ面白いのが、何でもいいから手伝いに行きますと。地域の人たちも分かりやすい。「何をしてほしいですか」と聞かれても分からないのですけれども、「何かしに行きます」と言うと何か出てくるみたいなのが地域の面白いところかなと思います。自分たちで取りあえず行って見て、「何か手伝わせてください」と言いに行く。そういうのを地域と連携してやると面白いだろうと思いました。

とはいえ、地域の中でいつも一番つまらないと思うのは、ごみ拾い。用意され過ぎて、先輩もやっているから比べられてしまうことがある。結局、地域の人にやらされている高校生たち。地域が受け止めるのも、「また来たよ」みたいになる。というよりは、自分で

つかみ取った、創り出したと思える感覚がすごい。正に地域で変わっていくというのは当然だと思います。そう思うと、どうそれをやればいいのか悩ましいところですが、生徒たちが自分で新しい地域を創り出すのだという感覚を大人たちが用意し過ぎずにつくるにはどうすればいいかというのが澤岡委員のところではすごく大事だと思うというのが私としての考えでした。

【横田委員】 竹田委員のお話を今聞いていて、外部の方との接点をいかに持たせるのかというのは学校としてはすごく難しいところだと思うのですが、学校のほうがありお膳立てをし過ぎずに、生徒が自分たちの興味がある人を見つけてくる。興味がある団体とつながる。自分たちの興味の赴くままに外との接点を見出して、それを自分たちで企画してみる。自分たちが自発的にできるような企画だったり、勉強の仕方であったり、探究的な学習の時間でそのような取り組みをすることも多いです。今、そういう活動は小学校から実践されていて、別のNPOでも働いているのですが、小学校5年生の女の子が私たちの活動を見つけて話を聞きたいと先生を通じてアプローチしてきました。小学生ぐらいからそんなことができるのだと少しびっくりしたのですが、そういったことが実現できる世の中なので、高校生ぐらいになるときっともつとできるだろうと思います。高校生の可能性を信じて、あまり型にはめたプログラムを設計しないほうがいいのではないかと思います。

あと、学校の委員などに外部の方や市民団体の方のお名前がなかったのですが、そういう方にはもちろん専門家という形でお話を伺っているとは思いますが、教材を作られたり、カリキュラムをつくられたり、学校のデザインをするのにできるだけ多様な方の参画がすごく大事だと思うので、その辺が気になりました。

【石田校長】 最初のところで、いろいろな方から言っていただいて、今いろいろなチャレンジ設定の中で「産業社会と人間」、「人間と社会」といった科目は置けるのですが、もちろん、「総合的な探究の時間」を今のところ2年次で学校としては3単位置かなければいけないという縛りがあります。1年次は「産業社会と人間」、「人間と社会」やチャレンジ設定科目などをやっていながら、2年次で「総合的な探究の時間」を1時間。これはグループ研究を、学校で一定程度テーマを設定してあげた中から選んでやる。それで1回練習したところで3年次に2単位、個人研究。今お話しいただいたところで、自分はこういうことをやってみたいといったところで是非どんどん外に出していきたい。生徒に外の人と連携してもらいたい。そういったところまで持っていければいいかなと思っているのが

一つ。

もう一つは、学校の組織として、学校の経営や形に関していろいろアドバイスを頂く学校運営連絡協議会という仕組みにつきましても、今年度、来年度でこういった人に来てもらいたいというものを考えながらやっていきたいと思います。今回の渴望しているところは、第三者的な改善・指摘といったところでもし関わっていただけるのだったら是非お願いしたいという思いもあります。

【笹井会長】 横田委員の話に関係するのですが、学校というのはすごく目的的な施設なのです。目的を設定すると、目的実現のためにこうしなければいけない、ああしなければいけないとミッションが出てくるわけです。でも、今必要なのは、広石委員も言っていましたけれども、脱目的というのでしょうか。目的ではない空間や時間が実は結構必要で、不登校の子供たちはそういうものを必要としているのではないかと思うのです。ところが、学校の中にいたらなかなかそれができないので、外に出してあげることが脱目的な、いわゆる居場所というもの、そこで暮らす、時間を過ごすことが実現可能になるのではないかと思うのですけれども、学校教育システムの中にある以上はなかなか脱目的は難しいのですが、外に出すことによってそれが可能になるのではないかとって話を聞いていました。これは私の意見ですけれどもね。

もうそろそろ時間なのですが、まだ意見をおっしゃっていない方をお願いしたいと思います。福本委員、どうですか。

【福本委員】 少し遅刻をして入室したのですが、委員の皆様の勢いがすごくて発言する機会を逸していました。

チャレンジスクールの先生方、ありがとうございました。東京学芸大学教職大学院の福本と申します。学校組織マネジメントプログラムというところに所属しておりまして、学校経営や組織マネジメントなどを専門にしております。

今日気が付いたことはたくさんあったのですが、二つだけ申し上げさせていただきたいと思います。

先ほどほかの委員の方からも発言がありましたけれども、私のほうでは学校経営計画を拝見しました。ここに書かれている方策というところは、これ一つ一つにアクションプランが必要になってくると思います。つまり、先ほどありましたけれども、これ全ては無理ではないかというのが端的な印象です。二つ目に申し上げたいところにつながるのですが、恐らくチャレンジスクールだからこそ全て網羅したい、これも入れたい、あれも入れたい

という結果としてこういう学校経営計画になったのではないかというふうに思います。そこでアドバイスとしては二つです。

一つは、どこまでが教員がやることであって、どこまでがほかの力を借りるのかという線引きを明確にされたほうがいいと思います。その線引きと申し上げても、先ほど来、支援という言葉があるのですが、私は、チャレンジスクールだからこそ、周りで関わっていただく地域の方やその他の方々、それを支援という位置付けではなく、正規のメンバー、正規のスタッフという位置付けにすべきではないかと思います。サポートしていただくという言葉で過ごしていると恐らくどこかで消えてしまって、全て教員に回ってくるのではないかという気がします。チャレンジスクールだからこそ、教職員組織というのは外部が入って当たり前だという一例にすべきではないかと思います。そういう意味で、外部からの支援という枠を超えて——正規といっても法令上難しいと思いますが、正規に近い、これが組織なのだということをチャレンジスクールというのは入れて当たり前だという伝統を是非つくっていただきたいというのが一つです。

もう一つは、チャレンジスクールでいろいろ盛り込みたいのは分かるのですが、これを1年でやるのは無理だと思います。私は、マネジメントは3年サイクルで考えています。1年目は何をやって、2年目は何をして、3年目で何をやって、それを振り返るというスタンスです。同じように、生徒に身に付けさせる力というのも3年ワンサイクルで考えたらどうかと思います。一気に全てを生徒にあれもこれもというのは無理だと思いますので、生徒がどういうふうにグラデーションで成長していくのかというのをイメージしていただいて、どのチャンスで何をを入れていくのかというカリキュラムマネジメントをしっかりとやられたらどうかというふうに思います。

すみません。長くなりましたが、以上です。

【笹井会長】 ありがとうございます。今の御意見、御提案についてはどうですか。

【石田校長】 はい、もうおっしゃっていただいたとおりで、どうしても学校経営計画は少し総花的な形になっているので、開校1年次で、年次進行で生徒が増えていく、教員も増えていく。そういった中でどの校務分掌、どの組織で何をやる、どこまでやる、そういったところはこれから整備していくところなので、今御指南いただいたところは正に私がやらなければいけない仕事というのが一つです。それこそ学年次ごと、グラデーションごとに、どこまで何を伸ばすかというのは本当に実践的体系化をしていくところはやっていきたいかなと思います。また、それをつくったところで是非アドバイスを頂けるとうれ

しいかなというのが一つです。

もう一つは、確かにそうだなと思うのが、正規スタッフにしていく。これが仕組み的にどこまでやれるか。やってから考えるというのもあるのですけれども、一方で、継続性がないと続かないというのもあるので、ここはまた教育委員会の方々と御相談しながらやっていきたいというふうに思います。ありがとうございます。

【笹井会長】 ありがとうございます。

そろそろ時間なのでこの辺にしたいと思いますが、もし何か言い足りない方がいらっしゃいましたらお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

【石田校長】 カフェは……。

【主任社会教育主事】 カフェの話は次に回しますから。

【笹井会長】 それを申し上げようと思ったのです。校内カフェの話があるのですが、もう時間が中途半端になりますので、恐縮ですが、別の機会に議論させていただきたいと思います。

ということで、本日も非常に活発な御議論を頂きまして、ありがとうございました。本当に暑い中、石田先生、三宅先生、西村先生においでいただきまして、改めて感謝を申し上げます。

【主任社会教育主事】 せっかくですから、一言ずつ感想でも。

【笹井会長】 お願いします。

【石田校長】 私はもう……。

【三宅主幹教諭】 今日はありがとうございました。先ほどもお話しさせていただいたのですが、私自身が多分ステレオタイプの教育をしてきた側の人間だったのではないかなと思っています。こうあるべきだというのがとても強い。自分もそういう教育を受けてきたので。でも、私、実は定時制に行ってそこの見方が変わった部分があります。だから、是非、若手教員の皆さんには一回定時制に行ってこいと心の中ではずっと思っているぐらいですが、本当に価値観を変えられました。私自身が高校へ行って、部活動をやって、そこで記録を残す、どんな大会に出ていくということだけ为目标にして送ってきた人生だったので、違った人生を生きている子たちに出会っていろいろ価値観が変わりました。

今日いろいろな学校外のところで活動していらっしゃる委員の方の御意見などを頂いてすごく勉強になりましたので、今後のカリキュラムの形成に生かしたいと思います。あと、いろいろなお声を頂いたのですが、教員はやはり教科教育がメインで生きているところも

あるので、たくさんの方を処理するのは限界があると思っています。専任スタッフの方がいる、特に教科外の授業においては非常に重要になってくるかなと思っています。是非御協力いただければと思います。よろしくお願いします。

【西村主幹教諭】 貴重な御意見、ありがとうございました。私も大変勉強になりました。議論を聞いていて思ったのは、今まで学校は先生が生徒を指導するような形でやってきて、部活動もそうですし、放課後の時間、彼らがフリーになるのを結局先生が長時間指導して管理をしてきたというか、不良になつたりしないようにやってきたと思うのです。そのこと自体に少し限界が来ていて、いろいろな団体の力を借りる、地域の力を借りる時代に来ていると思うのですけれども、教員の側もそこを手放す勇気がなかなか、私もそうです。地域に解き放っていかなければいけないけれども、いや、自分が見たほうがいいのではないかというような気持ちが若干どこかに残っていたり。そこがこれからの学校の課題なのだろうと。いかに地域の方と一緒に学校をつくっていくか。教員はここをやります。こういうことはYSWに任せました。地域の団体に任せました。それでみんなで学校として生徒を教育できるかというようなことが大事なのだろうと。日本の学校文化自体が少しずつ移行しなければいけないところに立っていて、そういうことのジレンマに悩んでいるのかなと考えさせていただきました。

ありがとうございました。

【笹井会長】 ありがとうございました。我々としても大変勉強になりました。改めて感謝申し上げます。

それでは、事務局から今後の予定についての御説明をお願いいたします。

【生涯学習課長】 それでは、事務局から今後の予定についての説明をさせていただきますと思います。

笹井会長、それから立川地区チャレンジスクールの石田先生ほか皆様、本当にありがとうございました。

今後の予定でございますけれども、次回の第14回全体会の開催日と場所につきましては現在調整中でございます。追って事務局より御連絡をいたしますので、お待ちいただければと思います。

事務局からは以上であります。

【笹井会長】 ということで、これで本日の会議、東京都生涯学習審議会第13回の全体会を終了させていただきます。皆様、どうも御協力ありがとうございました。

閉会：午後4時58分